茅野市の博物館・文化財だより　No.43 2025. 3. 31

八ヶ岳通信

■ 尖石縄文考古館

仮面の女神　国宝指定 10 周年

茅野市尖石縄文考古館では 2024年８月23日から12月22日まで「仮面の女神」の国宝指定十周年を記念する特別展『造形と埋納が語る「仮面の女神」』を開催しました。

「仮面の女神」は縄文時代後期の土偶で、2000年８月23日に湖東の中ッ原遺跡から出土しました。「仮面土偶」と呼ばれるタイプの土偶で、顔に逆三角形の仮面をつけているように見えるのが特徴です。高さは34㎝と土偶の中では大型で、作りも精巧で表面はよく磨かれ、黒く輝いています。「仮面の女神」が出土したのはお墓と考えられる穴の中で、横たわった状態で発見されました。多くの土偶はばらばらの状態で出土しますが、「仮面の女神」は右足が壊れていたものの完全な形に復元できる状態で出土しました。また、周辺のお墓からは浅い鉢形の土器が伏せた状態で発見され、遺体の顔面に鉢（土器）を被せて埋葬する「鉢被せ葬」が行われていたと考えられます。「仮面土偶」や「鉢被せ葬」は今からおよそ4000年前の縄文時代後期に長野県を中心とする限られた範囲に認められるめずらしいものです。この時期は八ヶ岳山麓の遺跡が激減する時期でもあります。茅野市内でも縄文遺跡の多くが終焉に向かう中で、「仮面の女神」や「鉢被せ」を伴う葬制は重要な意味を持っていたと考えられます。「仮面の女神」は発見当時から注目を集め、県宝指定、国の重要文化財指定を経て2014年８月21日に「鉢被せ葬」に用いられた８点の土器と併せて国宝に指定されました。縄文時代の国宝としては全国で６件目、茅野市内では「縄文のビーナス」に次いで２件目の指定でした。

特別展では「仮面の女神」のこれまでを振り返るとともに、国宝指定理由を切り口に「仮面の女神」の魅力や縄文時代後期の葬制に迫りました。会期中は当館の所蔵品に加え、鉢被せ葬が行われた人骨が複数出土した「北村遺跡」（安曇野市）の土器や破片で見つかった仮面土偶（長野県立歴史館 蔵）、「仮面の女神」と同じくほぼ完全な仮面土偶である「日本のへそ土偶 縄文の母 ほっこり」のレプリカ（辰野美術館 蔵）を借用し展示しました。

11月30日には「仮面の女神」の国宝指定に尽力いただいた原田昌幸さん（元：文化庁主任文化財調査官）をお招きして「縄文世界の土偶 - 仮面土偶を取り混ぜて - 」と題した講演をいただきました。講演では土偶の発生から現代の土偶研究が抱える問題まで幅広い内容のお話をいただきました。

2024年に引き続き、2025年は「仮面の女神」出土25周年・「縄文のビーナス」国宝指定30周年のアニバーサリーイヤーです。それぞれにちなんだイベントを計画していますので、どうぞご期待ください。

南北朝時代の守矢文書

建武２(1335) 年に、最後の北条家当主だった北条高時の遺児である北条時行を擁して、諏訪上社の諏方頼重、時継父子が中先代の乱を起こしました。

７月に挙兵し、一時は足利軍から鎌倉を奪還するも、８月19日に逆に足利軍に攻められ、父子ともども鎌倉勝長寿院で自害しています。

守矢文書の中には、諏方頼重、時継の書状が遺されており、今回は時継の書状２点を紹介します。

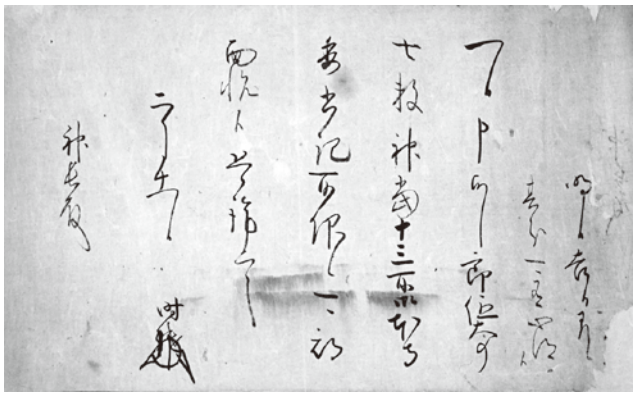
ひとつは年未詳４月５日付書状です。内容は、小笠原信濃守が諏訪上社を参詣する時に五官祝が出仕することを神長に依頼し、また、時継が神長に、以前は水干だったが、藍摺り(の水干か) を着るべきだろうかと問い合わせています。そして、神長に早朝に出仕して御柱と出会うところまで来るように依頼しています。

文中に出てくる「小笠原信濃守」は、小笠原貞宗(1292–1347) のことと考えられます。小笠原貞宗は建武元(1334) 年に信濃守護となっているので、これ以降に作成された書状であると読み取れます。

もうひとつは年未詳２月11日付の書状です。２月１日に申した即位大事の七数神・当十三所・御本地について、詳しいことは書き記すという仰せで、お目にかかることを悦ばしく思っています、という内容でしょうか。

即位大事のことについては、具体的なことは不明ですが、実際の大祝即位に関する記述だとすると、建武２(1335) 年２月９日に時継の息子である頼継が７歳で即位している(建武２年『大祝職位書留』) ので、このことを指していると考えられます。

以上のように２点とも、神社の神事などの場面において、大祝が神長に色々、問い合わせているところをみると、諏訪上社内のことは神長がすべてを把握していたことがうかがえます。



年未詳２月11日付　諏方時継書状

郷土のことばを楽しむ「諏訪ことば方言カード」

「まえでの席へどうぞ。」この文章にかくれている方言に気が付きましたか？「まえで」という言い方は、諏訪地方や長野県内で広く使われている方言です。地域や個人によっては、やや訛って「めぇで（めーで)」とも言いますが、標準語では「前の席へどうぞ。」または「前の方の席へどうぞ。」となり、「で」を付けません。

令和４年度から茅野市と学術協定を締結している国立国語研究所「市民科学」プロジェクトの協力により開催したミニ展示「知らなかった！諏訪ことば」では、地元の方も旅行者・移住者など他地域からの方もみんなで楽しめる方言に関する展示を行いました。

信州・諏訪の方言の定番「ずく」、「ごしたい」、「とびっくら」などは、県外の人にとっては想像もつかない言葉で、そういう言い方をするのか、知らなかった！という感想が聞かれました。一方で、「(洗濯物を) よせる」、「水くれ当番」、「いただきました。(食事のあとの挨拶)」など、普段使っている言葉が実は方言だったなんて知らなかった！と驚く地元の人も多くみられました。「きびしょ」、「ごうがわく」、「ひどろってぇ」など、祖父母は使っていたけど自分では言わないとか、子どもたちは全く知らなかった郷土の言葉との出会いがあったようです。世代を越えたコミュニケーションを通じて、ふるさとならではの言葉がこれからも残っていくといいですね。

こうした身近な言葉から厳選して作成した 36 枚の「諏訪ことば方言カード」は、おもて面に諏訪ことばが書かれ、裏面にはその用例と標準語がイラスト付きで解説してあるカードです。ウェブブック（初級・中級・上級、各 12 語）も公開しており、下のＱＲコードからもご覧いただけます。文中に出てきた気になる諏訪ことばを確かめてみてください。

アートカードゲームで遊ぼう！
きてみて！おしゃべりアート（学校連携）

茅野市美術館では2024年7月28日 ～ 9月1日に「Re-SHINBISM２　そして未来へ」(主催：信州アーツカウンシル（(一財）長野県文化振興事業団、長野県 ）を当館が共同主催し開催しました。

シンビズムは、2016 年度より長野県芸術監督の本江邦夫氏のもと、県内美術館などの学芸員が所属を超えて交流し、同じ立場で協議しながら信州ゆかりの出品作家を選定、これまでに第1回～第5回展ま で 計 18 会場にて全 76 名の作家を紹介してきました。

本展「Re-SHINBISM２　そして未来へ」は、シンビズム 2（2018 年開催）の作家たちに焦点をあて、県内 4 館で同時開催した作家の作品が茅野市に一堂に会することで、その後の 6 年間を振り返り、作家たちがいかに進化し、現在どのような作品を作っているかを示し、今を見つめる企画展でした。

その関連イベントとして、2024 年 8 月最後の週にシンビズムワーキンググループ学芸員（当館学芸員含む）と茅野市美術館サポーター・美遊 com. の進行のもと茅野市立北山小学校 1 ～ 4 年生、茅野市立永明小学校 6 年生のみなさんを対象に行ないました。

アートカードゲーム「どこが似ているかな？ゲーム」

アートカードとは、作品の画像をはがきサイズに印刷し、カードにしたものです。今回は17名の展示作家の作品を2点ずつ合計34枚のアートカードにし、「どこが似ているかな？ゲーム」と「作品はどれだ！？ゲーム」の 2 つを行ないました。「どこが似ているかな？ゲーム」は、似たもの同士を探すゲーム。色や形で似ている部分を探していきます。「作品はどれだ！？ゲーム」は、ゲームの「親」が秘密で選んだカードを推理するゲーム。「親」にYesと Noでしか答えられない質問をしていき、最後にはどの作品だったか当てます。

どちらのゲームも作品をよく見ないと似ている部分を見つけたり、質問をしたりできないので作品をじっくり見ながら、ゲームに集中している児童たちの様子が見られました。

「○○と○○が似ている！」「あ、本当だ！」「どこが似ているかわからない…」「見せて！これとこれは？」「その作品はこういう形がありますか？」「具体的なものでいうと、どういうもの？」

アートカードゲーム「作品はどれだ！？ゲーム」

後日、美術館に訪れた児童たちは、作品 2 点を対話鑑賞し、最後は自由に作品を鑑賞して回りました。

きてみて！おしゃべりアート（学校連携）対話鑑賞の様子

「カードで見た作品がある！」「本物はもっと細かかった」「こんなに大きいと思わなかった」「作者のこだわりが見えて良かった」「遠くで見るのと、近くで見るのとで印象が変わることを知ることができた」「もっと見ていたかった」などの感想がありました。

また、後日、引率の先生たちからは、作品の部分に注目するだけでなく全体のイメージを話す様子や教室ではあまり発言をしない児童もこの日は話す様子、あまり感想文を書くのが得意でない児童が紙にびっしりと感想を書いていたりする様子、そして、授業後にもう一度、来館した児童もいたという話がありました。このような取り組みから美術館へ親しむきっかけになればと思います。

きてみて！おしゃべりアート（学校連携）対話鑑賞の様子

知っていますか　『諏訪史第一巻』刊行100年

令和６（2024）年は、大正13年に諏訪教育会から『諏訪史第一巻』が刊行されてから100年の節目の年でした。これを記念して令和７年２月から諏訪地方の７か所の博物館・美術館が合同で企画展を開催しました。しかしそもそも『諏訪史第一巻』とは、一体何でしょうか？実は「尖石」遺跡が初めて記録されたのがこの『諏訪史第一巻』であり、諏訪地方の考古学研究の一つの出発点ともいうべき記念碑的な著作なのです。

・「諏訪郡史編纂事業」の開始

大正７年、諏訪郡の事業として郡史編纂事業が開始されました。地元に元教員の今井真樹、東京には現在の岡谷市出身で東京帝国大学を卒業、後に文学部長になる西洋史家の今井登志喜がそれぞれ主任として任命され、諏訪郡の通史を編纂するための調査研究を開始しました。その際に中央学界の研究者の顧問委嘱が計画され、先史時代の項目を東京帝国大学人類学教室の鳥居龍蔵が担当することになりました。鳥居は師である坪井正五郎の諏訪湖底曽根遺跡の調査に伴って諏訪に来た経験もあり、諏訪地方の先史時代には高い関心を持っていました。また今井真樹も鳥居が東京で主催していた民間有志の郷土史団体「武蔵野会」の活動に注目しており、中央の研究者を招聘することで一流の研究書を作ることを目指しつつも、地域住民を主体とした郷土史を志していました。

・人類学者・鳥居龍蔵と「尖石」

鳥居龍蔵とはどんな人物だったのでしょうか？明治３年徳島県に生まれた鳥居は、明治19年、結成されたばかりの東京人類学会に入会し、のちに東京帝国大学人類学教室で働きます。その傍ら遼東半島、台湾、モンゴル、南中国、シベリアなどアジア各地で調査を行い、独自の考古学・人類学を築き上げました。

そんな鳥居の関心の一つに「巨石文化」がありました。巨石文化とは、イギリスのストーンヘンジに代表されるような世界各地に巨大石造物を残した先史時代の文化を総称したものであり、東北アジアや朝鮮半島の支石墓もそうした「巨石文化」の一つであると考えられていました。郡史編纂事業のため諏訪地方の遺跡の踏査を行った鳥居はここ豊平村南大塩広見で「尖石」を発見し、これを先史時代の巨石モニュメントの一種「メンヒル」ではないか、と考えました。そして当時「南大塩の遺跡」と呼ばれていた本遺跡を「尖石遺跡」として世に紹介したのです。

現在の「尖石」

・みんなで作った『諏訪史』

諏訪地方には古くから遺跡や考古遺物に関心を持つ人々がいました。実は尖石遺跡も明治26年、湖東村上菅沢出身で当時東京高等師範学校に在学していた小平小平治により『東京人類学雑誌』に報告されたことで、初めてその存在が中央に知られました。その弟で俳人の小平雪人は、膨大な考古遺物を蒐集し、その一部は『諏訪史第一巻』編纂の資料として活用されました。またこの他に米沢村在住の田實文朗、永明村の矢﨑源蔵など、多くの地元愛好家の蒐集品が提供されています。『諏訪史』は、そうした地元有志の郷土史家たちの協力なくしては、完成しなかったのです。

茅野市の博物館・文化財だより　八ヶ岳通信　No.43　発行年月日　令和7年3月31日

編集・発行　茅野市尖石縄文考古館　〒391-0213　茅野市豊平4734-132　TEL(0266)76-2270
茅野市神長官守矢史料館　〒391-0013　茅野市宮川389番地の1　TEL(0266)73-7567
茅野市八ヶ岳総合博物館　〒391-0213　茅野市豊平6983番地　TEL(0266)73-0300
茅野市美術館　〒391-0002　茅野市塚原1-1-1　TEL(0266)82-8222
文化財課文化財係　〒391-0213　茅野市豊平4734-132　TEL(0266)76-2386

八ヶ岳通信
バックナンバー